
ファンタシースターポータブル2「小さな翼と歩く悪意」

ジュラルミンダンボール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタシースターポータブル2「小さな翼と歩く惡意」

【NZコード】

N1204T

【作者名】

ジュラルミンダンボール

【あらすじ】

ハロー・ハロー・人類諸君。SEEDが消え去つてメデタシメデタシつてならなくて残念だつたね人類諸君。ところで人類諸君。完全に人の形をして、人のように感情を持ち、人に紛れて人のように暮らすSEEDがもしも居たとしたら人類諸君。人類諸君は、どうするね？

第一話「死にたいわけじゃない。」（前書き）

やつちまつた！ なんてこつた！ まあ良いか。そういうワケでまさかの連載一本目投下です。ファンタシースターポータブル2の主人公がもしも××××だったら？ という内容のお話です。とりあえず主人公のプロフを。

名前：リア・ゲート

性別：女性

種族：ヒューマン（？）

年齢：27歳

身長：174Rp

体重：62Kv

タイプ：レンジャー

服装：上下共にストーリアの黒黒

その他：髪は少し短め。肌が色素が無いかのように白い。瞳は黄色と言つより金色で、白目が黒い。左目を眼帯のようなヘッドマウントディスプレイで隠している。

程よい大きさと良好な形をしている。

第一話「死にたいわけじゃない。」

「あらあら、随分と人が多いのねえ。」

海底レリクスにて。実力さえあれば誰でも可との事だつたので来てしまつた。面接の後の抜き打ちテストといつ名の不意打ちに手荒く対処してしまい、随分とひどい怪我をさせてしまつたのが悔やまれる。とりあえずは狙い通りに、簡易携帯食の配給が配られる。適当な場所に腰掛けで配給を食べていると、不意に声を掛けられる。そこそこ身長の高い、男性型のキャストのようだ。

「よつ。所属無しつて事はフリーか？」

「ええ、まあ。」

「そうか。それは大したモンだ。場所が場所つてだけに腕利きを集めているのかもしねんな。」

「そうですねえ。このレリクスは最近見付かったモノ、だそうです
ね？」

「ああ。発見されたのはごく最近で、この辺りまでは安全なようだが、奥は正に未開の地つてワケよ。久しぶりに儲けが出そうだな。「ん~、でも人数が人数ですし、山分けつてなると少し心配ですねえ。何人か殺しておいた方が・・・」

「おいおい、冗談でもそれは止めておけよ？　ここは未開のレリクスなんだ、何が出るか分かつたモンじゃない。まあ、放つておいても何人か死人も出るんじゃないかな？」

といつた具合の不謹慎極まりない話題で盛り上がりをつけていた、少し離れた所から高くて幼い感じのする、女の子の声が聞こえてきた。

「帰ろう！　帰ろうつて！」

男性キャストが後ろの方で駄々をこねている女の子の方を見る。

「なんだ？　あの子供は？」

「さあ？　実戦未経験にしか見えませんけれど・・・？」

女の子が駄々をこねている相手はそこそこの体格を持つ、ロング

「マークの男性だつた。

「「ひるせえ！ 今からお前向けの仕事を取つてきてやるから、マークを動くんじゃねーぞ？」

そう言つと、男性は女の子を残して行つてしまつた。

「あらあら。こんな所に女の子で一人にするなんて。」

「確かに、あまり気分の良い光景では無いな。まあ、不謹慎極まりない話をしていた我々にどうこう言える話では無いかもしけんが。と、その時。突然大きな地震が起つた。そして出入り口が徐々に閉まつていく。私と男性キャストは出入り口に近い場所に居た。しかし女の子は大分遠い場所に居る。しかもあるう事か頭を抱えて座り込んでいる。これはマズイと思い、女の子に駆け寄つて肩に抱き上げて走る。

「ふえ！？ ちょ、あのー！」

「あ、暴れないで！ って、うわあ！？」

女の子が暴れた拍子に床の「ボコボコ」に躊躇して転んでしまつた。お陰で扉が閉まるまでに外に出る事が出来なかつた。むつくりと起き上がりながら女の子に話しかける。

「いつた～い・・・なんで暴れたの～？」

「だ、だつて・・・」

そう言つて顔を赤くしながらもじもじと裾の方を若干引っ張つている。

あ、なるほど。そういうえば慌ててたせいで抱きやすさ重視のお尻が前に来るスタイルで抱いていた。これはつまり、扉の辺りに居た人達から見れば「おパンツですよ！ 少女のおパンツですよー！」と言わんばかりのスタイルになつてしまつていたわけだ。

淑女たるものそこまでキッチリ考えて動かないとね。いやあ反省反省。

「あらあら、ごめんなさいね～？ あ、私はリア・ゲート。あなたのお名前は？」

「え、エミリア。エミリア・パーシバル。って言つたか、今のこの状

況つて・・・

「ええ。閉じ込められちゃつた～って状況ね。まあ扉は開かないモノと割り切りましょう。」

「割り切つて～・・・で、どうするの？」

「お尻を無意識にぱんぱんとはたきながら立ち上がり、言った。
「先に進んでみましょう？ もしかしたら、別の出口から出られるかも知れないもの～。」

「え、ええ！？ 先に進むの！？ あ、危なくない？」

「ん～、そうねえ～。きっと危ないでしょうねえ～。ま、でも、死んでしまったその時はその時、所詮はそこまでの命だつたって事で、良いんじゃないかしら？ それに・・・」

そこまで言つて、愛銃のショットガン、違法改造が施されたシッガ・デスターをナノトランスさせて手元に呼び出し、それを右手だけで持つてエミリアの頭に突き付ける。

「伏せなさい！」

「ひうっ！？」

エミリアが頭を下げるとき同時に引き金を引く。後ろに居たエビルシャークの上半身がアゴと腕のみを残してバラバラに吹き飛ぶ。撃つた反動を利用して銃を手元に引き寄せて左手でポンプアクションを行い、エミリアが居る側の反対から、私目掛けて飛び掛ってきたエビルシャークに向かつて再び発砲する。

上半身と下半身が強力な力で無理矢理捻じ切られたソフトビニール人形のようにいびつに千切れで分かれ、吹き飛ぶ。

「す、すご～・・・。」

「ここにはもう安全地帯じゃ無いのよ～。ここに留まっていると、こうじう品の無い方々がわざわざ来る可能性も高いの。だから少な
くとも、移動は行つべきだと思つわよ～？」

「う、うん。分かった。って言つたか、あんたと一緒に居る事にするから！」

「あら～？」

「だつて、あんたと一緒に何とかなりそうだし！」

「あらあら～。それじゃ、張り切つて行きましょうか～。」

「ん～、多いわね～。ちょっと疲れて来ちゃったわ～。この子もそろそろメンテナンスしたいし・・・。」

連續で既に50体近くを討伐している。いい加減に疲れて來たし、それにシッガ・デスターの銃身も焼けて來た。そろそろメンテナンスが必要そうだ。

と、エミリアが不思議そうな顔で質問をしてくる。

「あれ、シッガ・デスター・・・つていうかテノラの製品つて耐久力が高い事がウリじゃなかつたっけ？」

「あらあらよく知ってるのね～？　そうなのだけど、この子は私がアレンジを加えてあげた特製だから、耐久力が著しく低くなっちゃつてるのよ～。その代わり、普通のシッガ・デスターなら片手撃ちなんでしたら肩が外れちゃうけど、この子なら多少は平氣だし、破壊力は・・・まあお察しの通り高いしね。」

「ふ～ん。ねえねえ、ちょっと貸して？」

「良いわよ。はい、どうぞ。」

周囲に目を軽く走らせながらエミリアに渡す。

手に取り、隅々まで観察するエミリア。その眼はまるで、他社の武装の研究を行つてゐる技術者のように鋭くそれでいて好奇心に溢れていゐる。

「ふ～ん、なるほどなるほど。緩衝装置の全長を伸ばして反動を小さくしつつ、広がつたリアクターのスペースにもう一つ、ハンドガン系のリアクターを積んだのね。どうりで長く見えたワケだ。なるほど、これなら威力も上がるし反動も小さくなるね。でもコレ、作りが荒いよ。これじゃあ折角のフレーム剛性が台無じじゃない？それに、この銃身材つて軽さを基準に選んだでしょ？　これって熱

に弱いから銃身材には向いてないよ？」

それを聞いて悔しさ半分に少しイジワルを囁く。

「あらあら～。じゃあ今度、エミリアに改良をお願いしようかしらん？」

「え、あ、いや！ 無理無理！ あたしのは知ったかだし！」

「無理！ 絶対無理！ と連呼しながら私にシッガ・デスタを返そうとこちらに来るエミリア。と、ここでエミリアを左手で突き飛ばして半歩下がる。私が居た所とエミリアが居たところの丁度重なる辺りに、亀のような形の変な外見のスタティリアの一種がこちらに向けて砲弾のような物を撃つてきた所だつた。

私は仕方なく右手を変化させてプリンガーライフルにして構え、撃ちこむ。しかし射撃に耐性があるらしく、効果は薄そうだ。しかし、それでも数を撃ち込めば話は別だ。無数の黒いエネルギー弾にとうとう装甲を貫かれ、蜂の巣になるスタティリア。尻餅を付いているエミリアに駆け寄つて声を掛ける。

「大丈夫だった？」

「う、うん。平氣だけど、その銃は？ 今、ナノトランスしないで出したように見えたけど……？」

「え？ あ、いやあ氣のせいじゃないかしら？ ちゃんとナノトランスしたわよ～？」

「いや、でもこう、一コシつて……」

「いやいやいやいや、氣のせいや氣のせいや～ も、早く立つて！

行きましょう？」

「それにしても、なんでレリクスなんてあるのかしらねえ？ ねえエミリア？」

話が途切れたので苦し紛れに強引にエミリアに話を振る。

「う～ん、それには諸説あるらしいんだよね。ともかく旧文明が存

在してた事は間違い無いとして、何故旧文明人はどうしてレリクスみたいな建造物を作ったのか、なんだけど・・・旧文明人が生きた時代にもSEEDの襲来があつて、身を守る為に建造したっていう説が多分一番代表的なんじゃないかな。確かにこの説は信憑性が高いんだけど、でも矛盾点もあるんだよね。まず第一に、既にSEEDは封印されて全滅してるハズなのに、何故こうして新たに起動したレリクスが有るのかって事。次に、対SEEDの為ならどうしてSEEDの襲来と共に一斉に起動しなかつたのか。有る程度の間を置いて、それぞれがそれぞれのトリガーに合わせて順次起動していくとすると、単純に対SEED用とは考え難いんだよね。他にも、色々とあつて・・・あ。

私がポカんとして聞き入つていてる事に気付き。硬直するエミリア。私はそんなエミリアを目を丸くして見つめながら、素直な感想を述べる。

「詳しいのね～。びっくりしたわ～・・・」

エミリアが若干慌てた表情で言つ。

「え！？ あ、いや、常識よ、常識！ 傭兵ならこの位知つて当たり前なの！」

「あらあら、じゃあ私は二ワカなのかしら～？」

「う、うううう・・・・・」

エミリアが不機嫌そうな顔をする。

「も、もう！ ほら、さっさと行こ～！ 早く出口見つけて、早く外に出て、早くあのおっさんに文句言いまくつてやるんだから～！」

「おっさん？ つて、あのロングマートの？」

「あれ、知ってるの？」

「う～ん、詳しく述べは分からないわ～。エミリアが駄々をこねていた相手でしう？ その程度。」

「え、まさかさつきの見てた？」

「ええ、ばっちり。「いやだ～、帰りたいよ～！」 つて駄々をこねている所の一部始終。」

ほぼ完璧な声真似に自画自賛したくなる気持ちを乗せてエミリアにどや顔を見せ付ける。何故か少し落ち込んだ表情をするエミリア。表情豊かでカワイイ子ねえ。

「うう、見られてたんだ……あのおっさん、あたしが働かないからって無理矢理軍事会社なんかに入れて、しかもいきなりこんなレリクスにほつぽつて！　あー、もう！　何かむしょうに腹が立つてきた！　ねえ、こんなか弱い女の子をレリクスに放り出すなんて酷いと思わない？」

「そうね～、確かにちょっと厳しいわね～。」

「そうだよね！　そりゃああたしも仕事を選り好みして全然やらなかつたけど、これは流石に酷いよね！」

「ん～、選り好みするのはともかく、全然働かないのは問題じゃないかしら～？」

「え～？　何、もしかしてあんたもおっさんの味方～？」

「そんな事は無いわよ～？　ただ、ちょっとエミリアに同情の余地が少ない気がしただけ。まあ、ここから脱出して、言いたいだけ文句を言えば良いんじやないかしら～？」

「ぶ～、なんか誤魔化された氣がする～！　ま、それもそうだよね。よ～し、絶対にこつから脱出するぞー！　おー！　・・・って事で、よろしく！」

「・・・あんまり、人に頼り過ぎるのは良くないと思つわよ～？」

「()」は・・・

大きな通路のようなスペースに出た。両側にはズラリと大きな騎士のような形の物体が。何だか微妙に莊厳な雰囲気で思わず立ち止まってしまう。

「()」、これ全部、人型の大型機動兵器だよ？　タダでさえコツチ見て怖いのに、動き出したらって考えると・・・うう、早く行こう

よ～・・・。」

エミリアが後ろに隠れるようにすがり付いてくる。背後のエミリアを見て、思わず顔が綻んでしまった。

もし、自分にこの位の子供が自分に居たらきっとうんぬを感じんだろうな、なんて考えてしまって。

と、エミリアの側からは反対側、私から見れば前方から大きな駆動音がした。振り向くと、こちらを向いて武器を片手に吼えている。威嚇のつもりだろうか。エミリアが慌てた声で言つ。

「ちょ、ちょっとちょっと！ 言つたそばから動き出さないでよー！」

私は左腕でエミリアを制する形を取り、エミリアに言つ。

「少しづつ下がつてなさい。」

「えー！ む、無茶だよ！ あんなデツカイの相手に一人なんて！」

エミリアの方に目を向け、少し強く言つ。

「じゃあ、手伝ってくれるの？ いえ、あなたに私を手伝える？」

「う、そ、それは・・・」

「なら下がつてて。大丈夫、あの程度ならいくつ出て来ても負けないわよ。」

エミリアが悔しそうに唸り、そして言つ。

「わ、分かったわよ！ あんたのその大丈夫って言葉、信じるからね！」

「ええ、信じて待つて。」

そう言つて、田の前まで近付いていた巨体の機械騎士と対峙する。

大斧を横に構える。それを見て高くジャンプする。足元を一撃必殺の破壊が通り過ぎる。私は空中で機械騎士の頭にショットガンの照準を合わせ、抜群の破壊力を持つ銃弾を撃ちこむ。しかし、

「あらあら、硬い子ね～？」

確かに少しだけ装甲が剥げた。しかし停止にはほど遠い。これは装甲部分に撃ちこんでも大したダメージにはなりそうもない。それならと着地と同時に横つ飛びに斧の大きな縦振りをかわして脇腹辺

りの装甲の無い部分を狙う。ショットガンの銃身をほとんど刺し込むように突きつけて引き金を引く。すると、

「G W A R R R R R ! ! ! ! !

巨体が大きく揺らぐ。なるほど、やはり。硬いのは装甲だけ、むしろ脆い装甲の下を覆い隠して守るための堅固な装甲というわけだ。それからも攻撃をかわしては装甲の隙間に銃弾を撃ちこんでいき、とうとう完全に動きを止めるに至る。

「ふう。ま、意外と楽しめたわね～。」

そんな事を言つていると、後ろからエミリアが驚いた顔でこちらを見ている。

「す、すごい……あんな大きいの、一人でやつつけちゃった……。

「ふふふ、ね？ 大丈夫だったでしょう？」

「う、うん！ ほんと、すごいね！ ちょ、ちょっと信じてみて良かつたかな～って……。」

「あらあら、それは良かったわ～。」

そう言つて一人でしばし安堵の空氣に浸つていると、そいつ等は突然、全機、ほぼ同時に動き始めた。エミリアに近い機体がエミリアに容赦無く襲い掛かる。

「え・・・？」

そう言つて驚愕の表情のまま固まってしまうエミリア。私は機械騎士が動き始めたのとほとんど同時に地面を蹴つて駆け出していた。そしてエミリアを弾き飛ばすと、ショットガンを盾にして大斧の一撃を受け止めようとする。しかし、もう限界だった。

ショットガンは大斧の一撃を受けた瞬間、ひび割れ、砕け、細かなパーティと壊れたフレームの破片と化した。

そしてある程度は勢いが減殺されていたとは言え、大斧の一撃が左側頭部から頭部の四分の一近くを削いでいった。

粉々の破片になつて粉碎される眼帯のようなヘッドマウントディスプレイ。

しかし、私は倒れない。それ所が、血の一滴すら出ない。削がれ、宙を舞つた左側頭部がべちゃりと汚らしい音を立てて地面に落着し、その場で黒い粒子となつて霧散する。

それは撃破されたSEEDフォームのそれと良く似ていた。

私の中から、今まで私の形として丸め込んでいた物が、黒い液体のように左側頭部から溢れ出す。

それは私の左半身、特に左腕を瞬く間に覆い、影のようにも見える真っ黒いそれは瞬く間に大きくなり、それらを螺旋状に隠すようにして、緑色の点滅する点が規則正しく並ぶ紫色の帯のよつな物が覆い、それは最終的に太く、禍々しい、巨大な蔓とその先端に蕾のような形の膨らみのある触手のような物となつた。

私はそれを大きく振り、真横から機械騎士に叩き付ける。機械騎士は上半身だけがちぎれるようにして壁に叩き付けられ、粉碎し、その場には支えるべき上半身を失つた下半身だけが残つていた。

Hミリアが驚愕と恐怖を顔いつぱいに表現した表情でこちらを見る。私は左腕の触手を大きく振る。Hミリアが体を小さくするが、勿論エミリアを狙つてはいない。

Hミリアを後ろから狙つていたやつを叩き潰したのだ。エミリアが恐る恐ると言つた感じで顔を上げ、そしてこちらを見ると同時に叫ぶ。

「う、後ろお！！！」

その瞬間、後ろを振り返るが間に合わず、胸に深々と大斧が抉りこみ、地面に叩き付けられてから完全に背中に貫通する。その後もう一機が現れ、一機で私をメチャクチャに叩き潰しまくる。末端が幾ら破壊されても平氣とはいえ、そのメチャクチャな斧の中には核に致命傷を与えるような一撃も当然のようにあつたワケで、私の意識が段々と薄れていく。

私が動かなくなつたのを確認したのか、二機の機械騎士はエミリアにゆっくりと歩を進める。私はギリギリで動く首でエミリアの方を見る。

エミリアの後方からはさらにもう一機が近付いている。私は渾身の力を振り絞り、体の大きく開いた傷口から左腕と同様の触手、しかしサイズは少し劣る触手を十本ほど飛び出させて私をメチャクチヤに叩き潰した一機を突き刺し、完全に破壊する。しかしそこで力尽きてしまう。体から飛び出させた触手が黒い粒子となつて霧散する。私は薄れしていく意識の中で必死に口を動かす。しかし動いてるかどうかも分からぬし、そもそも声が出ていない気さえする。目も一応開けているつもりだが、他人から見れば閉じているかもしない。

私の口の動きに気付いたのか、それとも本能かは分からぬが、エミリアが私に走り寄る音が聞こえる。そして何か・・・恐らくはエミリアに搖さぶられる。一揺れ、二揺れと段々と意識が薄くなつていいく。

「どうして・・・どうしてあたしなんか底つて・・・ねえ、ねえ起きて、起きてよー。どうして・・・? どうしてみんなあたしを置いてつちやうの・・・? お願いだから、目を開けてよお・・・あたしを・・・一人にしないでよお!!」

その瞬間、不思議な物を見たような気がした。エミリアの顔に浮かぶ回路のようなオレンジ色の線、エミリアの背後に浮かぶ円のような物。そして・・・

「あなたを・・・死なせはしません!」

・・・・女神?

第一話「死にたいわけじゃない。」（後書き）

はい、ようやくとプロローグ終了です！　長いね！　まあ原作がこうだから仕方ない！　で、ネタばらしをしますと、主人公は元人間の大型SEEEDです。まあ過去のお話とかは次回があれば追々という事で。ではでは。

第一話「だけじゃ生きてられないんだよ。」（前書き）

リトちゃんの口調が乱れますが、仕様です。ええ、仕様ですとも。では第一話、「ぐるりくつとお楽しみくださいな～。

第一話「だけど生きてりゃいけないんだよ。」

「・・・ん・・・」

なんだか妙に眩しい。なんだ、地獄つていうのも案外にも明るい物なんだなあ。そう思いながら目を開ける。

目の前にグラマラスなスタイル抜群のひ・・・キャストが居た。

「アラ、おつきしたネエ。チヨット待つててネ？」

そう言つてキャストの女性が奥の方を向いて誰かを大きな声で呼んでいる。

私はその間、周囲を見渡す。派手さの無い質素な、良くなある作りの、随分と小奇麗な・・・事務所？ か何か。何より地獄の割りに明るいし、天国に私が来れるとは到底思えない。

と、言う事は・・・生きてる？ いや、それは考え辛い。だってあの時、私は核に致命的なダメージを受けたし、そうじや無くとも形状を保存しておけない程までに全身にダメージを受けていた。「中身」丸出しならいくらでも生きていられるけれど、それにしてはキャストの対応が普通過ぎる。

人類種の天敵を目の前にしたら普通はもう少し慌てたりしそうなモノだけど。と、言う事は姿形に関してはちゃんと人間のフリができる？ ソれにしてもミンなオイしソウ・・・

ハツと氣付いて左目を押さえる。眼帯、もといヘッドマウントディスプレイが無い。慌ててタオルをナノトランスさせて取り出し、左目が隠れるように押さえ、簡単な眼帯の代わりにする。

応急処置だが仕方が無い。後でどうにかしてライアさんに連絡を取つてまた作つてもらつとしよう。頭の後ろでしっかりと縛り、ズレない事を確認すると近付いてくる足音に気が付く。

「よう。ようやくお目覚めか？」

「あ、はい～。お陰さまで～。」

そう言つて声を掛けて来た男の方を見る。背の高いビースト。色

のセンスがイマイチなロングコート。ボサボサの髪とヒゲのせいで、顔が鼻と頬ぐらいしか見えていない。

胸元を大きく開けており、そこにはぶ厚い胸板が。少しまさ過ぎる。年も相当行ってそうだし、あまりタイプじゃないかな。オイシソウダケド。

「？ どうした、そんなにジロジロ見て？」

「い、いえ。何でも……あ、それより女の子を知りませんか？」

「あ？ 女の子だあ？」

「こ、う、金髪で、赤い目の……」

「金髪で赤い目？ あ、アイツか。今呼んだ所だ。そろそろ来んだろう。」

と、後ろのドアが開いた音がした。それと同時に何だか落ち込んだような女の子の声が聞こえてきた。

「う、おっさん、今日くらいはかんべんしてよね……。あたしがどんな目にあつたか知ってるでしょ……。」

「知らねーし、興味もねーからかんべんしねーよ。つたぐ、客の前でそんな顔すんじゃねーよ、みつともねえ。」

女の子が不満そうな顔でおっさんと呼んだビーストの男を軽く睨んでからこちらを向く。

「えっと、初めてまして。って、どうかで会つたような……？」

その女の子を見て、私も驚く。

「Hミリア……！ 良かつた、無事だつたのね～？」

「あ、あんた……どうして生きてるの！？ ねえ、何で！？ 何で、おっさん！？」

「あら心外。何だか生きてちやいけないみたいな言い方ね～。」

「人を勝手に殺してんじゃねーよバカ！」

おっさんに罵られても特に意に介する風も無く、

「良かつた、ホンシトに良かつた。アレで死なれてたら一生モノのトラウマだよ。良かつた。そうだよね、あそこで起きた事つて全部夢だつたんだよね、良かつた……。」

何度も「良かつた」を繰り返して安堵するエミコアそれを見て
おっさんが小声で

「よーしょーし、狙い通りエミコアも良い感じに懐いてるな・・・
と言った後、こちらを向いて手を肩に掛けて少し顔を近づけて言
う。お酒臭い。

「お前さん、フリーなんだろ？ 丁度良い、このままウチの会社に
入っちゃまえ。今なら住む場所と居ないよりはマシ程度のパートナー
も付けてやるぜ？ どうせ身寄りもねーんだろ？ ウチは働きの良
い社員にはボーナスもはずむぜ？ どうだ、この辺時世乗らねー手
はねーだろ？」

「へ~、パートナーまで付けるなんておっさんも珍しく太っ腹だね
」。

意外な一面を垣間見て関心したような表情のエミコアに、おっさ
んが肩越しに呆れたような目線を投げ付ける。

「何他人事みたいな顔してんだ。お前の事に決まつてんだろ。」

そう言つと共にこちらに向き直り、口角を少し引き上げて若干黄
ばんだ歯を見せながら私に聞いてくる。

「で、どうする？」

「ちょ、おっさん！ あたしにも選ぶ権利を・・・」

「義務も果たせねーようなバカに権利なんざねーんだよ！ で、ど
うする？」

正直、かなり悩む。確かに一人で動くのはいい加減にキツくなつ
て来た。常に食べ物に困る生活はもう嫌だ。

しかし正真正銘の「おばけ」が果たしてヒートの集団の中で生きら
れるのだろうか？ 正直、正体を明かさずに輪に入つて正体を明か
した時の反動が怖いし、それならばと正体を明かしても、当然の如
くに弾かれるのがオチだ。なら、やつぱり・・・

「ええと、嬉しいんですけど、お断りさせて・・・」

「おおそつか。いや、しかしな。ウチも慈善事業をやつてるワケじ
やねーんだ。」

「へ？」

電卓をポケットから取り出して、何やらポチポチと打ち込み始める。

「ええと？」「今まで運ぶ運搬代金と、メディアカルチェックの費用、そんでききるまでの護衛代金、コイツに人件費と燃料代と手数料を併せると・・・ま、ざつとこんなモンだな。」

電卓を突きつけてくる。と、それを見た時に、やっぱり人類が嫌いになりそうになつた。

「い」五百萬メセタつて・・・

「即金で払えるか？」

「これだから人類は・・・（ブツブツ）」

「ああ？なんか言ったか？で、払えるのかどうなんだ？」

「払えませんよ～！こんなの平均的なサラリーマンの年収から税金を引かなかつた額と同じぐらいじゃないですか～！」

「払えねえだあ？しつかし払つてもらわなければコッちも困るんだよな～？」

「ぐぐぐ・・・」

食い殺してやうつか。本氣でそう思った。しかし今そんな事をしたら今の今まで平和的に過ごして来たのが全て泡と弾けてしまう。殺意をグッと飲み込んで、今取れる最善の選択を取る。

「分かりましたよ・・・」

「よし、決まりだな。既にお前のマイルームは用意してあつから。おい、エミリア。コイツを部屋まで案内してやれ。」

「なんであたしが・・・」

「何か言つたかゴクツブシ？」

「なんでも無いですー！」はあ。じゃ、あたし居住区の入り口の前に居るから。」

そう言つて出て行くエミリア。

「親子仲、悪いんですね～？」

「はあ？ 親子？ 誰と誰がだよ？」

「おっさんとHミリア。」

「おっさんってなあお前・・・そういうや自己紹介して無かつたな。

俺はクラウチ・ミコラー。お前は?」

「リア・ゲートです~。」

「ワタシはチャエルシー！ヨロシクネ～！」

「あ、はい～。よろしくお願ひします～。」

「おうチャエルシー、どうぞ紛れに自己紹介たあ流石に抜け目ねえな。で、書類は?」

「モチロン持つてきたヨ～」

そう言ってチャエルシーが私に書類を差し出す。

「口々と、口々に署名、お願イネ。本人直筆のサインじゃなキヤ無効扱いにされチャウからネ～。」

「はい～。」

そう言って指定された場所にサラサラっと書く。本人直筆、か。既にリア・ゲートって名乗つて良いのか分からないぐらいになつちやつてるけど、それでも本人で良いのかな。

そう思いながらもう一箇所にも名前を書く。

「はい、できました～。」

「ウン、コレでオッケーね。これカラもヨロシクネ?」

「はい、よろしくおねがいします～。さてと、それではこれで～。」

そう言つてその場を後にする。

「ふあ～あ・・・ねむ。あ、やつと来た!」
「あらあら～、待たせちゃつてごめんなさいね～？」
「まつたくもう一ま、良いや。とりあえず部屋まで案内するからついて来て?」
そう言つて歩き出すHミリア。レリクスの時もそうだったけれど、

こうして改めてみると本当に普通の子供にしか見えない。そういうばあの女神は一体何だったのだろうか？

思えばかなりキワドイ服装をしていたようにも思える。とはいえたとあのレリクスでの出来事は夢だったのだろう。そうに違いない。でなければあんなに理想的な死に時がるハズが無い。そんな事を考えていると、エミリアがとある一室のドアを開ける。「ここが、あなたの部屋。で、あたしの駆け込み部屋！」

「あら、今まで嫌なことがあつたらここに駆け込んでたの？」

「ううん、どうせあんた一人でしょ？ 何かあつたら入れさせて貰うから！」

「ええ～・・・」

別に構わないが、それにしても・・・。

「本当に普通のお部屋ね～・・・何があるワケでも無いし・・・むしろ落ち着かないわ～。」

「あ、それならインテリアショップに行けば？ テーブルとか箱とか色々あるよ？ 勿論リフォームチケットもね！」

「ん～・・・私、お金が無いのよね～・・・。」

「え？ もしかして・・・？」

「ええ、一文無し。そもそもあのレリクス調査に参加した目的だって携帯食料が主な理由だったし・・・。」

「あ、あははは・・・フリーの傭兵つてのも大変なんだね・・・。」

「まあ私の場合、身元が戸籍から出生届から根こそぎ無くなってるのもお仕事が取れない原因だったりするんだけどね～。」

「ふ～ん。」

ただ言うと、エミリアが目をショボショボさせながらベッドに腰掛ける。

「あ～、駄目だ。ホントに眠い～・・・。」

そう言つと共に全身から力が抜けて、糸の切れた人形のようになっただに倒れこむエミリア。部屋を軽く見回しながらエミリアの傍に腰を掛ける。

フツと思いついて、右手をプリンガーライフルの変異させる。どうやら体の方に異常は無いようだ。右手を戻すと、エミリアの寝顔を軽く観察する。

「うまじまじと見ると、一応は同性の私も少しだキッとしてしまう程度に可愛い。スヤスヤと寝息を立てて、ほんとウに力わいラシイ。まったくホントウにオイシソウ・・・・・・・・。ハツとなつて頭を振り、自分の頭の中の思考を搔き消す。とりあえず手元にはまだ300メセタほど残っていた筈だ。飲み物でも買って来て落ち着こう。

腰を上げてドアから外に出ようとすると、その時だった。

「待つて。」

後ろから、つい最近聞いた気がする女性の声が聞こえた気がしたのは。

「ここになら・・・一人で話が出来そうだから・・・。」「

さつきまでベッドで寝ていたハズのエミリアが、おぼつかない足取りで部屋の真ん中に立つていて。そしていつか見た、あのオレンジ色のような金色のような回路がエミリアの全身に走る。

そしてエミリアの体から出た金色の光が一箇所に集まり、そこに女の人が現れた。

見惚れるほど美しい人だつた。

流れるような金色の長い髪。

文句の付けようの無い抜群のスタイル。

その均整の取れたスタイルを見せ付けるかのように露出度の高い服装。

そして優しさを秘めた金色の瞳。

何処を取つても私より女性的で美しい女性だつた。

が、何かおかしい。

この人、そこに居ないように見える。

もつとも、物理的にエミリアの体の中にこの身長の人が入つていられるわけが無いのだから、立体映像的な何かと考えるのが道理だ

う。

生体をナノトランスしたと言つのなら、ハンディサイズのトランサーで生き物が生きたままにナノトランスできている事に疑問があるが。

と、その少し変な女性が語り始める。

「私はミカ。訳あってこの子に宿る、意識のみの存在です。この姿も、状態も、すでに失われた古の技術によるもの。失われた技術を旧文明のものと言うのなら、私は「旧文明人」となりますね。」

話がいきなり突拍子も無さ過ぎてどうにも言葉が見付からず、呆然とする。そしてミカが、旧文明に起こうたＳＥＥＤの襲来と、その旧文明が計画し、実行に移した「復活計画」に関して話し始めた。

大まかに話し終えると、ミカがこちらを見据えて、頭を下げる。

「どうか、この忌わしい計画を阻止するために、手を貸していただけないでしょうか？　この子は・・・心を閉ざしきついて、私の声を認識してくれないのです。」

「でも、あなただって旧文明人でしょう？　なら、何故阻止しようとするんです？」

「確かに私は旧文明人ですが、現代への回帰を望んではいません。私達は滅ぶべくして滅んだ。世界は次の世代に任せるべきなのです。

」
そう言つて一息付いてから、ミカが先ほどまでよりも、より一層深刻な顔をして、語り始める。

「・・・それに、貴方にとっては既に私の存在は他人事ではないのです。・・・何故、縁のないはずの私と貴方が話すことができるのでしょうか・・・？　そしてあのレリクスで自律機動兵器に襲われたのは、本当に夢だったのでしょうか・・・？」

その時点での嫌な予感が胸を過ぎる。と、確信的な一言を、ミカが言い放つ。

「・・・貴方は、生きているのでしょうか？」

私はその一言を聞くと同時に、ミカに掴みかかった。しかし実体は無く、手は空を掴むばかりだった。両手を握り、歯を食いしばり、普段では有り得ないほどに語氣を荒げる。

「何で私を生き返した！？　あのまま死ねばようやくこの太陽系から最後のSEEDフォームが消えたハズなのにッ！！！　あのまま死ねば私はまだリア・ゲートとして死ねたハズなのにッ！！！」

一人の「人間」として死ねたハズなのに！！！！

「ツ！」

「どうして・・・どうして私を死なせてくれなかつたんだツ！！！　SEEDフォームなのはアンタだつてすぐに分かつたハズだ！！！」

！！　私の身体は・・・私の身体はもう、戻れないんだ・・・・・。

」
その場に俯き、へたり込む。歯を食いしばって、拳を握り締めて。夢であつて欲しかった。あのまま死にたかった。あれ以上の死に時なんて、もう一度と無いだろう。

後はもう・・・また精神を侵されて、人を襲う単なるSEEDフォームに逆戻りして、その時の英雄に討たれるしか、もう無いのだろう。

「何で・・・どうして・・・・・

涙は出ない。もう涙腺が無いから。鼻水も出ない。鼻はあるが、これは「リア・ゲートの顔」を再現する為の形だけのパートであり、装飾品だから。

ミカは言葉が見付からないらしく、ただ、申し訳なさそうに斜め下に視線を落としている。

「・・・ふあ・・・・・」

Hミリアが寝返りをうつのを見て、ミカと私は同時にハツとする。と、同時にミカが少し慌てた様子を見せる。

「 ものの子が田を覚まします。詳しきはまたいづれ・・・」

そう言つて消えるミカ。と、HIIコアが田を覚ましそうになるのと同時に、部屋の真ん中でへたり込んでこるのは流石に変だうと思ひ、慌ててベッドの上に横になつているHIIコアの隣に腰を掛け
る。

「 ・・・ふあ、あつ。んー、ちょっと寝けやつた、かな？ ・・・

ん？ あのせ、なんでこいつ見つめてるの？

「 へ！？ え、ええと・・・あ、寝顔を見てたのよー 可愛いな~
つて思つて~。」

「 ちよつ・・・！ 寝てるのに気付いてたんなら起こしてよー。」

「 ん~、あんまり可愛い寝顔だったから~」

「 あーもひ、恥ずかし・・・」

そう言つて少し目線を外すHIIコア。内心冷や汗ダクダクだったのだが、汗腺も無いお陰でビリビリが誤魔化しきれたようだつた。

第一話「だけじゃ生きてられないんだよ。」（後書き）

へーい、第一話ですだよだぜーーー もう第一話から一ヶ月と半月ぐらいが過ぎてようやつと第一話とかマジ遅すぎますよね。すいません。まあサブ何で、そんなモンです。まあ実際の所を言つと、感想を頂いたのが嬉し過ぎて、執筆ハイブースタが掛かって止まりなくんつちまたのが原因なんですがね。ってな感じでまた次回！

これ、完結まで相当掛かるよなあ・・・。

第三話「それでも私は幸せでいたい。」（前書き）

リアちゃんの知っている情報は大体三年前ぐらいから止まります。でもパルムで生活していたので一部情報は一応知っています。その内昔話とかしつかり書けたら良いなッ！

第二話「それでも私は幸せでいたい。」

次はマイシップに案内すると、ライアを一旦部屋から追い出して、ライアさんに連絡を取る。

何でもライアさんはどこかのエライ人らしいのだが、詳しくは知らない。

知り合つたのは偶然にも病室のベッドが隣り合わせだつた事からだ。バイクで事故を起こしたとかで、立派な体格のやたら威厳のあるビーストやらキャスト、華奢で上品なニューマンやパリッシュした正装のヒューマンなんかが連日見舞いに来ていた。しかも全員やらと低姿勢だつたのが印象的だった。

隣のベッドで精神病患者さながらにロープでベッドに拘束されたいた私に向こうから話し掛けってきた時は驚いたものだ。少ししてすぐ打ち解けたのだが、その頃にはライアさんは先に退院してしまつた。しかし時折お見舞いに来てくれて、しかも無料で特注の「凄い眼帯」を作ってくれた。

ライアさん曰く、「壊れたらまたいつでも新しいのを用意してやるよ!」との事だった。そのお返しに、私はライアさんがお仕事で疲れた時なんかと一緒に街に繰り出して遊んでいる。

何でも立場上、仕事仲間とかは遊び等には誘い難いらしく。とはいえ、亜空間航行の実験やら何やらでライアさんの所もこの所は忙しいらしく、最近は随分とご無沙汰なのだが。

ライアさんに教えてもらつた個人回線の番号に掛ける。そういえば、このビジフォンから掛けるの初めてだな。でもきっと個人回線に掛かってきたら出てくれる人だろう。

『誰だ?』

ほらね。

「あ、ライアさん。お久しぶりです。」

『おおリアー! 久しぶりだねー元気してたかい?』

「はい、お陰さまで～。聞いてくださいライアさん！　私、ついに職に就けたんですよ！」

『おお、やつたじやないか！　じゃ、何かお祝いにプレゼントとか用意しないとな～。』

「あ、それでしたらあの、頼みたい事がありまして～。」

『頼みたいこと？　・・・ああ、眼帯の修理とかかい？』

「いえ、完全に壊れてしまつたので新調してもらいたくて～。お願いい、できますか～？」

『ああ、分かつた。で、何か追加したい機能とかはあるか？』

『う～んと・・・サーマルスコープと撮影機能、ですかね～。』

『撮影？　なんだ、お前が着いた職業つて情報屋か何かか？』

「いえ、折角腰を据えて仕事が出来るんですし、仕事仲間との思い出とかを写真にしたいなと思いまして～。」

『なるほど、な。分かつた。技術部の連中に伝えとく。』

「あ、あともつと頑丈にしてください。」

『具体的には？』

「ん～と～・・・真正面からの艦砲射撃に耐えられるくらいで～。」

『ハハハッ！　そりやまた面白い注文だ！　分かつた、限界まで頑丈に作るよう言つておくよ。じゃ、いつ頃になるかは後で追つて連絡する。じゃ、またな。』

「ええ、また。お体に気を付けてくださいね、ライアさん。」

『ああ、お前もな、リア。』

通信を終えてビジフォンをシャットダウンする。それから部屋の倉庫の手前の方に仕舞っていたパートナーマシンナーを起動して、基本設定を済ませる。

これで部屋に戻つて来た時にはエミコニアが乱して行つたベッドメイキングも完璧にしておいてくれる事だらう。

もし上手く行つてなくてもその程度のポンコツであると認識しておけばそれ以降は過度な期待をしなくても済む。

起動準備に入っているパートナーマシンナーを置いて、先に行か

せていたエミリアに合流する事にした。

「あ、やっと来た。じゃ、次はマイシップの説明をするからね。」

そう言つてまるでメモを暗唱して来たかのように業務報告と言つた感じで淡々と説明される。その手際の良さは何度も二つ言つた経験をして体で覚えているのではと思わせる程だつた。

転送装置からマイシップ内に入る。その瞬間、私は思い切り目を見開いて驚く。

「モデル9999（フォースナイン）…？ つそ、何でこんな高いのが…？」

そう。この社用として使われている船は各惑星の要人や金持ちが使つているような超高級モデルなのだ。

確かにこれならば三惑星間を休む事無く2400時間飛び続けても壊れる心配も無いだろうし、ワープゲートを使わなくとも別の惑星までほんの数時間で到着できるだろ？

しかしここで疑問が湧く。

「…・何で社用の船はこんなに立派なのに、事務所は普通なのかしら～？」

「あ～・・・この船今は社用として使つてるけど、元々はリトルウイングの社長のウルスラさんが個人で所有してた物らしくって。リトルウイングを創設した後になつて社用船が無い事に気付いて、仕方なく個人用の船をいくつか社用にしたんだつてさ。」

「なるほど～・・・そのウルスラつて人、相当儲けてるわね～。」

「まあ、ウルスラさんだしね～・・・。」

そう言つて少しだけ遠い目をしていたエミリアが、一つ可愛らしい咳払いをしてからまた説明を始める。

私はそれを適度に聞き流しながら船内の隅々に目を這い蹲らせた。

非常に綺麗に整備されているのでパツと見では分からないが、これはかなり使い込まれている。モテル9999は金持ちがステータスとして持っている程度の事が多いのでここまで使い込まれている物は非常に珍しい。

そしてメインコックピットを細かく見て行って、驚愕する。

「コイツ・・・改造船だ・・・！」

法定速度を大幅に超える速度まで示せる競技用船のスピードメーター。更に本来なら設置されていないハズのター・ボロケットの稼働率を示すメーターまで追加されている。何より通常とはまるで形状の異なるコンソールがこの船全体の恐るべき改造具合を如実に示していた。

「ちょっとー！ 船ばかり見てないであたしの話を聞けーー！」

耳元で叫ばれて慌ててエミリアの方を向く。

「あ、『めんなさいね～エミリア～。ちょっと夢中になっちゃって～。』

「まったく！ あ、そうだ、会社ではあたしの方が先輩なんだから、敬うようにな！」

「あ、はい～。よろしくお願ひ致します～。」

「うわ、駄目だ。キモチワルイ。やっぱ今まで通りで良いや。」

「あ、あら～？」

そう言つてちょっと困惑していると、エミリアは手近の椅子に座つて全身から力を抜いたようにダラッとする。

「は～あ、それにしても今日は色んなことが一辺に起きて疲れた～。。。初めての仕事でしょ？ いきなりレリクスに閉じ込められちゃうじ、あんたは・・・その・・・」

そう言つて言葉に詰まるエミリア。しかし私を見て少しだけ口角を上げると共に、

「まあ、全部夢よね夢ーつん、白昼夢ー 第一アレで生きてるハズ無いし！ あんたが生きてるって時点で夢確定よね！」

「あらあら～、私はエミリアの夢の中ではどんな死に方をしたのか

しら～？」

そう言いつつ、ヒミコアの座っている椅子の肘掛に腰を下ろす。
「う、それはあんまり・・・でもまあ、その・・・あたしが言った
事を・・・その・・・信じてくれたのは・・・嬉しかった、かな・・
・。ま、夢だけどさ。」

その俯きながら恥ずかしそうに言つさまが余りにも可愛らしく、私はヒミリアの頬っぺたを突付きながらもの凄く笑顔になる。
「ヒミリアったら可愛いこと言つちゃって、食べちゃいたくなる
わね～」

「え！？あ、まさかソッチ系の・・・

「言葉の綾よ～ 可愛い」

「むー！ と、ともかく！ あんたのこと色々教えてよ！」

そう言いつと共に跳ね上がるようにして椅子から立ち上がるヒミコア。立ち上がってから半回転してこちらを向くと、人差し指を私の鼻に突きつけて言つ。

「わたし達、パートナーなんだからー。」

「でもヒトに指差すのは止めておきなさいよ～？」

「う・・・は～い。」

私は完璧にSEEEDだった。いや、人として生活はしていても結局、今でも私の身体はSEEEDフォームである事には間違いは無いのだが。

それでも、自己を認識する上で私はヒトであるよりSEEEDであると認識していた時期があった。今ではすっかりヒトを取り戻せているが、それでもやっぱり身体の方はSEEEDのままだ。
それがどうしようも無く悲しく、どうしようもなく虚しい。

結局、私はどちらなのだろう？

私はヒトなのだろうか？

一月も飲まず食わず眠らずで居られるヒトなんて私は電源を落としたキヤストぐらいしか知らない。

私はSEEDなのだろうか？

SEEDウイルスを自発的に散布しないように務めるSEEDフォームなんて聞いた事が無い。かのヘルガ・ノイマンですら他のヒトにSEEDウイルスを植え付けて散布していたのだから。

私はヒトなのだろうか？

身体を変異させ、SEEDフォームを産み出す事で無限に近い戦力をその身から搾り出す事の出来るヒトなんて有り得るハズが無い。私はSEEDなのだろうか？

ヒトを庇つて死ぬ事を望むSEEDフォームなんて有り得るのだろうか？ ヒトを大事に思うだけの心を持つたSEEDフォームなんて有り得るのだろうか？

私はどちらなのだろうか？

心はヒトであると信じたい。

だが身体がSEEDである事は否定のしようが無い。

私はSEEDとして沢山のヒトを殺した。

その何れもが死んでも仕方ないと言われるほどの最底辺とも言える連中だつたとしても、私は本当に沢山のヒトをその手に掛けた。その中には私の両親も含まれている。

両親に関してだけは「子供達」に任せず、自分の手で殺した。頭から硬い金属製の床に向けて叩き付けた。小汚い花を床に咲かせた。私にとつての最高の死に場所は、エミリアを庇つたあの海底レリクスだった。それでも私は生き延びた。いや、生き返らされた。

きっとカミサマと言うヤツが私に天罰を与えたのだろう。ヒトである事を一度諦めて、SEEDと言うバケモノになつた事を言い訳に、実の両親すらも手に掛けた私に。

「理想的な死に方はさせない」と。

「もつと苦しんで生きる」と。

HIIリアはどうやらあのレリクスの一件を夢だと思つていらし
い。

だからそれが、「夢」から「現実」に変わった時、きつと私の正
体を知ると共に私から離れてしまうのだ。

それは凄く悲しいし、凄く辛いし、凄く苦しいが、仕方の無い事
だ。

SEEDEフォームと一緒に晒たら、いつ汚染されるか分かつた物
じや無いんだから。

むしろ穢れの知らないあの子を犯してしまつ前に、自分から離れ
た方が良いのかも知れないとすら思つ。

でも。

でも、もう少しだけ。

もう少しだけ、この暖かい夢を見ていても・・・良いでしょ?

「HIIリア～、そつちは終わつたかしら～？」

「ま、まだ・・・つてうわあ！？」

「HIIリア！…」

HIIリアがヴァーラの一撃を辛うじて避けると、少しみつともな
い体勢でヴァーラの前から逃げる。

追い討ちを掛けようとしているヴァーラの両腕の手首にあたる部
分にフォトンの弾丸を撃ち込む。

痛みで悶えながらもこちらを向いたヴァーラの両手が次の瞬間に
はフォトンの弾丸が突き刺さり節穴になる。

悲鳴を上げるべくして開けられた口に更にフォトンの弾丸を撃ち

込まれ、とうとうヴァーラは絶命する。

「う～ん・・・やつぱり200メセタのレンタルブドウキ・ハドじや精度悪いわね～・・・。」

「そのレンタルブドウキ・ハドにも劣るあたしの戦力・・・やつぱあたしこの仕事向いてないんだよ・・・。」

精度の低い整備も悪いレンタルされたハンドガンのブドウキ・ハドの照準を微調整していると、エミリアが誰が見ても分かるほど落ち込んでいる。

「でもみんな最初はそんな物よ～？ 英雄イーサン・ウェーバーも同盟軍総司令官フルエン・カーツも最初は素人から始まってるんだから～。」

「異議あり！ キャストは最初から基本的な戦闘方法はインストールされてると思います！」

「あらあら～？ でもインストールされてる分だけじゃハウツー本読んだヒューマンや何かと変わらないのよ～？ 現に我が家に乗り込んできたキャスト共だつて～・・・」

そこまで言ってこれ以上はマズイと思い、止める。

「ど、ともかく、最初はみんな素人なのよ～。諦めるのはもう少し頑張つてからにしましょう～？ それに危ない時は助けてあげるから～。ね？」

「う～・・・はあ、分かったよ。もう少し頑張つてみる・・・。」

照準の調整を終えて、先へ進む。

ここは惑星パルムのラフォン草原。

生え茂る草に寝転びたくなるのは恐らく万人に共通する感覚のハズだ。勿論私も寝転びたいが、仕事で来ているのでそもそも言つてられない。

今回の仕事はヴァーラの群れの討伐。何でも最近、この辺の農家が飼育しているコルトバがヴァーラの群れに執拗に狙われているらしい。

大した報酬は貰えない物の、危険はそこまで高くはないのでエミ

リアの実力を見るには丁度良いと思い、この仕事を引き受けた。

エミリアは以前、クノーと言つヒトに戦闘の手解きを受けた事があるらしく、基本はちゃんと出来ていた。基本が出来ていれば本来ならそこまで苦戦する事も無いのだが。

「うげ！？」

エミリアは基礎的な体力がまるで無い。

エミリアの背に飛び付いているポルティの四肢の末端を撃ち抜いて剥がし、数回バウンドしてこちらに転がってきたダルマ状態のポルティの頭部を踏み潰して殺す。

その間にエミリアは正面に居る一匹の内片方を右手のセイバーで切り伏せ、もう片方を数歩下がってハンドガンによる射撃で仕留めていた。

たったそれだけでエミリアは肩で息をしている。戦闘の緊張と言うのも勿論あるのだろうが、それでもこれは致命的な気がする。

「・・・エミリア、帰つたら筋力トレーニングしましちょう？」
「えー！」

無事にヴァーラの群れを殲滅した頃には、エミリアは大の字になつてそこら辺中に血溜まりの出来た草原に寝転がつて居た。
シールドラインのお陰で返り血を浴びてないのでエミリアから出た出血では無いとすぐに分かるが、服が赤いせいでのヒトによつては即座に勘違いを起こすレベルで衝撃的な絵だ。

「もう・・・はあ・・・もうムリ・・・動けない・・・・・・」

そう言つて疲労を全身で表現しているエミリアの傍に行く。

「あらあら～。それじゃ、よつこいしょつと～。」

そう言つてエミリアを抱き上げる。思つていた以上に軽くて驚いたが、何よりいきなりお姫様抱っこされたエミリアはかなり困惑している様子だった。

しかしそれでもすぐに慣れたのか、異性では無いのであまり意識せずに済んだのか、直ぐに平静に戻っていた。

「それにしてもリアつてほんと何者なの？ 精度とか威力にぶつくさ文句言う割にはヴァーラ一体倒すまでにほんの一秒钟ぐらいしか経つてなかつたし。つて言つたが、ハンドガン一丁での数相手にあそこまで立ち回れる？ フツー。」

「ヒミリアだつて沢山修羅場を潜り抜けていけばすぐにこれぐらいは出来るようになるわよ～？ あなたはどつてもスジが良いもの～。同じ失敗は繰り返さないし～、覚えも良いし～。」

「そ、そう？ エ、えへへ・・・なんか恥ずかしいな・・・。」

「でも基礎体力が低すぎるから、ちゃんと鍛えないとけないけどね～。」

「う・・・で、でもその辺もテクニツクで・・・！」

「テクニツクを使っても体力は使うわよ～？」

「むぐぐぐ・・・あ、そう言えばあんたつてテクニツク使わないよね？ 何で？」

「理由は無いけれど、強いて言つなら銃が好きって事かしら～？」

「へ～・・・。」

それからも他愛ない話をしながら船の場所まで歩いて行つた。

第三話「それでも私は幸せでいたい。」（後書き）

第一章、ようやくの終了です。

この後は多分、普通に第一章が始まります。

これからも大体一章三話ぐらいに纏めれたら幸せだなあ・・・。
そうすれば大体、三十話目くらいでラストですからね。まあ色々と脇にブレまくるんでしょうけどね！きっと！

追記：ライア総裁はリアの正体や経歴を知った上で親しくしています。その辺もその内書けたらいいな！

第四話（聞）「グラールには従順清純派メイドをタイプより生意氣タメロボタ

マクマホンじゃ無くてオクラホマニキサーじゃ無くて幕間つてな
ヤツです。あの、大体のアニメや漫画で一番内容が無くて笑える、
あの辺りですね。

なるべくギャグっぽく仕上げようと頑張ったんですが、所詮は金
屬製の箱ッ！（キリッ）
ギャグセンスは流石の皆無ッ！（キリッ）
無駄な努力だつたッ！（キロッ）

第四話（聞）「グラールには従順清純派メイドさんタイプより生意氣タメ口ボク

「あら、意外と出来る子だつたみたいね～？」

「うう～～～、随分と綺麗になつていてる部屋を警め回すように見回しつつ、キッチリとベッドメイキングの施されたベッドに腰を掛けた。

と、同時にまるで魔法少女から露出度を引いて、聖職者の服装を足し合わせたような緑色の服に身を包み、服と同系色の長い帽子を被つた、私のお尻ぐら～いの背丈のお人形のような少女がトロトロと歩いて来た。

確か型番は『GH440』だつたか。出発前に入力しておいた名前を呼ぶ。

「ただいま、メリ～。ちやんとお仕事できる子みたいでよかつたわ～。

「はい、お帰りなさいご主人。」

「ん～？」

「？　どうかした？」

「いえ、タメ口のパートナー・マシナリーって随分と斬新なセッティングだと思つただけよ～。」

「ああ、それはきっと一ีズつてヤツだね。きっと居るものなんだよ、従順なメイドさんタイプより生意氣な妹タイプの方が燃えれる人が。」

「ふ～ん？　あなた随分詳しいのね～？」

「まあ、そう言つ一ีズに応える為に作られたタイプだからね。」

「へ～・・・ちなみに～、燃えるって何に燃えるのかしら～？」

「え、それは・・・。」

頬を赤く染めて目線を外す。その様子があまりに可愛くて、ついにイジワルしたくなってしまった。

「な・に・に・燃・え・る・の・?」

「え、え~と・・・その・・・」

「え~とじや分からんだけど~?」

「う、ううう・・・・・」

顔どころか耳まで真っ赤になり、もう涙目になってしまい、帽子を引っ張って目元まで隠してしまっている。

流石にこれ以上はかわいそうだと想い、後頭部のあたりにそっと手を添えて撫でるようにしながら、

「うふふ、大丈夫よ~、ちやあんと分かつてるからね~。それに私、機械にそつ言う事を求めるつもりも毛頭無いから安心してね~。」

「あうひ~・・・酷いよお・・・。」

「あらあら、一応同性なのだけど~? あなたつてむしろわっちの方がつて子なのかしら~?」

「ち、違うよ! そ~じや無くて! ····んもう、ご主人のイジワル!」

そう言つてベッドのある場所から離れて、キッチンへと逃げるよう走つて行く。

それを笑つて見送つてからバスルームに行き、シャワーを浴びて寝巻きに着替えて床に着く。

その晩、私の眼帯として巻いているタオルを取りうとした誰かの腕を捕まえる。嫌に細い腕だった。

「誰？」

「あ、あの、ボクだよー。メリーだよー。」

「ああ、メリー。」

そう言つて掴んだ細い腕を放してやる。上半身を起こし、私の隣に座るようにしていれるメリーを見下ろす。後でメリーから聞いた話なのだが、その時の私の目付きはまるで、『お預けをくらつた猛獸のような眼』だつたらしい。

「メリー？」

「は、はい！」

「あなた、少し生意氣に設定されてるらしいけれど、世の中には生意氣や悪戯で済む事と済まない事があるって、わかつてゐのかしら？」

「え、ええ、まあ・・・。」

「・・・良い？　『私から絶対に眼帯またはそれに準ずる物を取らない事』。分かった？」

「は、はい！　分かりました！」

「うん、分かれば良いのよー、分かればー。」

そう言つてメリーの頭をポンポンと軽く叩いてから布団を持ち上げて自分の体に乗せ、眠りにつこうとする。その時、ぼそりと一言付け加えておく。

「もし破つたら、起動状態でスクランプにするから。」

「は、はい！ 心得ましたあーー！」

「フツ・・・まだまだね、ヒミリア。」
「むぐぐぐ・・・ちょっとリアー、なんなのよ」の生意氣」の上な
いパートナー「マシナリーはーー！」
「あらあらー。」

今日も今日とて、パルムのラフォン草原。今度は突然変異の原生
生物を捕獲して欲しいとのお達しだった。名前は・・・失念した。
依頼主はイン・・・なんとか社つて大企業だったと思つ。

何でも、色々な研究に使うらしいのだが。しかし、強引に実験台
にされた経験のある私としては若干抵抗のある仕事だつたりする。
とは言え、仕事は仕事。

報酬はかなりしょっぱかったような気がするが、それ位の報酬し

か出ないような危険度の低い依頼の方が、Hミリアの訓練には丁度良いだろ?」

まあ、今回はいつの間にやらシップの中のコンテナに潜んでいたメリーが付いて来てしまっているのだが。

「セイバー系統の武器を持つておきながらダガー系統の武器を扱うようなら至近距離まで近付くなんて・・・ホント、ハウツー本を読んだだけって感じだね。」

「だつてしようがないじゃん! あたし最近まで戦つたことなんてなかつたんだし!」

「ボクだつて最近起動したばかりだよ? そんなボクにも劣るなんて・・・まったく、本当に駄目だなあ。」

「うぐぐぐ・・・もう! リアも何か言つてみー。」

「あらあら~。」

「そこ! 誤魔化さない!!

「ん~つと~・・・。」

正直、メリーの言つている事は吐き気を催す程度には正論だ。故に、真正面から言ひ返すのは難しい。なので、今回は揚げ足を取る方を選ぼう。

「メリー、ちよつと言ひ方が悪いわよ~? あと、貴女も人の事言えない程度には槍を振る間合いが近いんじゃ無いかしら~? 折角の長い得物なのに、そのリーチが生かせてないわよ~?」
「え、うん・・・でも、Hミリアにはこれ位言わないとつて思ったんだけど。」

「いいえ~、Hミリアはアレで結構飲み込みが早いんだから~。そんなに罵詈雑言織り交ぜなくても分かつてくれるわよ~?」

「う~ん・・・分かった、今度から気を付ける。」

「うん、素直でよろしい~」

目線を少しずらし、ミリアへと向ける。少し離れた場所で、エミリアがその場で軽く素振りをしている所だった。

と、その奥で干し草にも似た、褪せた黄緑色の巨体が動いているのが見えた。全身は硬そうな外殻で覆われているらしく、手足が合計で四本しか無い所を除けば昆虫が最も近い分類に見える。

その両腕と頭部は胴体や足に比べると明らかにオーバーサイズであり、両腕の先には大きく、金属光沢のある爪が生えていた。

しかしその爪自体は特別尖っているワケではなく、むしろそれはメリケンサックの様な用途を感じさせる物だった。

「ミリア、ちょっと静かに。」

「へ？」

「奥にあの・・・ア・・・アス・・・えと・・・なんだっけ？」
「アスターク。まったく、何でブリーフィング受けてないボクが分かつて、まともにブリーフィングを受けたハズの『主人』が分かんないんだ？」

「あらあら～。うん、そのアメトーク」

「アスターク。何で面白い回とつまらない回が半々の深夜番組と聞違えるの。」

「そのアカツキ」

「アスターク。金ぴかロボでも忍者の秘密結社でも無いから。」

「そのアレイスター」

「アスターク。どうして二十世紀最大の魔術師の名前が出てきたの？」

「そのモハメッド・アリ」

「アスターク！！！どうすれば伝説のボクサーと間違えるの！？それによアしか合って無い上にその『ア』も中途半端な所だよね！？もうご主人、いい加減にしないとホントに怒るよーーー？」
「そんなに怒鳴るから～。ホラね～？」

そう言つてアゴで斜め上方を指す。と、そこには先ほどまで遠くに居たハズの巨体が、右腕を大きく振りかぶったポーズで上から降つて来る所だった。

エミリアは飛び上がつたタイミングに合わせてしゃがみ込む事で回避し、メリーは慌てて真後ろに跳んで逃げる。

私はどう動いても今からだと間に合わない。

アスカラングレーじゃ無くてなんだっけ？が目の前まで迫る。私は咄嗟に膝を折つてその場に崩れるようにして仰向ける。うに背中から倒れこみ、ポケットから強烈な睡眠薬が入つたアンプルを右手で取り出す。

アサシングリードが私の頭の上数ミリの所に腕を落着させると同時に、そのままティープキスが出来そうなほど顔に近いアジアンカンフージェネレーションのアゴと思しき部位の下の奥の方、平たく言えば首の血管が通つてそうな辺りに右手に握つていたアンプルを手が埋もれるほど深くに差し込み、中身を挿入する。

すると突然、力が抜けたかのようにガクッと頭が前に落ち込み、

「~~~~~!!!!!!」

本当にティープキスするハメになつてしまつた。

「アッサラームアレイクム・・・恐ろしい相手だったわ〜・・・。」

「ま、まあまあ！別にファーストキスとかじゃ無いんでしょ？ホラ、そんなに気を落とさないで！」

「と言うかアスタークだつてば」主人。アラビア語で挨拶してどうするつもりなのさ。それにしても何と言つが、張り合ひの無い仕事だつたね。」

「ああ、それならワケがあるそつよ～。」

「ワケ？」

「ええ、何でも、複数の軍事会社や傭兵に依頼を回したらしくつて、それで、10のグループで一匹ずつ、合計10匹捕まえるつて計算らしいわよ～。」

「なるほど、つまりその10のグループで報酬が等分されて、そのせいで異常にしょっぱい金額しか報酬が貰えなかつたつてわけね。」

「ええ～、そう言つこと～。で～、ウチが一番速かつたらしいわよ～。報告入る時に驚かれちゃつたわ～。」

「ふ～ん。ま、ボクとしてはどうでもいい事だけね。」

「あら薄情ね～。」

「う～ん・・・あたしとしてはもつがよ～～つだけ、練習したかつたかなあ・・・。」

「あらあら～？じや、やつて行く～？特別メニュー～」

「う、遠慮しとく・・・セ～とつと帰りつ。帰つて運動した分何か食べたいし！」

「ボクも早く家に戻つてお風呂に入りたいな。」

「あら～、じや、早上がりせで賣つてしまつが～？」

「「おーー。」

第四話（聞）「グラールには従順清純派メイドをタイプより生意氣タメロボタ

本編と関係があるよ「うな無」よ「うな？そんな第四話で『』じゃこまして
『』じゃこましてですよ！ さてさて、次から第一章に入つて行く形に
なると思いますだよ！ ってなワケで、次回までしばしお待ち
を～！ ではでは～！

あ、ちなみにこのパートナーマシンナーの話は雑炊さんのを読んで
感化された結果です。勝手にパクつてスイマセンでしたあ～！

第五話「この時間が永遠に続ければ良いの。」（前書き）

何でこんなに次話投稿が早かつたのかって？！ それああんた、事前にこの辺りまで書いてあつたからに決まってつしょ！ つてなワケで、本編第一章、始まり始まりでござりますー！

第五話「Jの時間が永遠に続けば良いの。」

まるで揺れの無い快適極まりない船をわざわざ手動航行モードで、しかもわざわざワープゲートを通らないルートで悠々と航行していく。

行き先はクラシド6のリトルウイング社用船用船着場だ。鼻歌交じりに飛ばしてくる私の肩をエミリアが叩く。

「ねえ、ちょっと良い？」

「ん~? 何かしら~?」

「何でわざわざ手動で、しかもワープゲート使わないルートで行つてるの? 経費と時間の無駄じゃない?」

「あらあら~。でもね、エミリア。さつき見た入つてるお仕事の中には急ぎのお仕事は一つも無かったもの~。時間は少し無駄に使うぐらいが丁度良いのよ~?」

「いや、でも結局燃料は無駄使いしてんでしょう? そつまつないのでイチイチおっさんにどうやされるのイヤなんだけど。」

「大丈夫よ~。無駄使いしたのは私だもの、どうされるのはきっと私だけよ~。」

「いや、だからあ・・・あ、通信だ。」

そう言つて少し強引に話を切り上げてエミリアがコックピットフロアの中央にセッティングされている仕事の受付を行つたり会社から通信を受ける「スゴイビジフォン」の方へ行き、掛かつて来た通信を受ける。発信先の名前を見た時、露骨にエミリアの表情が曇る。まるで職員室に呼び出されてイヤイヤながらに入る子供のような顔で回線を開き、通信を始める。

向こうが色々とやかましく言つ続けているのか、エミリアは

「…………はい…………はい…………」

と言つて答えるばかりで、明らかに表情もテンションも沈んで行く。

「ええと、本人は今月のツケは払つたって言つてたんですけど……はい……分かりました、本人にそう伝えます……。」

そう言つて通信を切り、エミリアが海溝を思わせる程に深く重い溜め息を吐く。

「今の誰宛～？」

「おっさん宛。ちなみに今のは家からの転送通信。ついでに相手はおっさんの行きつけの飲み屋。おっさんさあ、あたしには働けって言つけど自分は昼間つからお酒飲んではつかだし、飲み屋はツケで飲んでくるし……バリバリ働いてとは言わないけど、人並みにはちゃんととして欲しいよね。アレでも一応あたしの保護者なんだし。」

「確かにそうね～。ツケ払いは良くないわね～。まあ私も食い逃げの一つや二つや三つする事もあるけどね～。」

「いやいやいや、食い逃げの方がマズイでしょ！？」

「後で払いに行けば良いかな～って思つて～。」

「そんなワケ無いでしようが！？」

「でもツケ払いってそういう事じや無いのかしら～？」

「むむむむ……はあ、ともかくあたしはこの事をさつさとおっさんに伝えたいから、ちょっとだけ急いでくれない？」

「はいは～い。」

そう適当に答えてター ボロケットに点火して急加速をしたら、エミリアが盛大に転んだ。

そして椅子に寄りかかって眠っていたメリーは、コテツと転んだがそれでも寝続けていた。

どうやら急激な加速や急速に変わる重力方向に耐えられなかつたらしく、エミリアが気分を悪くしたので、クラッシュ6に着いてから十分ほど小休止を取つてからリトルウイングへと向う。

歩いてる最中もエミリアは何處かおぼつかない足取りで、あちこちへフラフラこっちへフラフラ、生垣に突っ込んだりもしていた。少し面白いが流石に可愛ううなので、エミリアを支えながら事務所へと入つて行く。

事務所では丁度毎休憩の時間なのが、チエルシーが電腦エネルギー補給用ゼリー（ライチ味）を吸いながら、テレビに釘付けになつていた。

流れているのはニコースらしく、グラールチヤンネル5の新人リポーターの紫色のツインテールが少しリズミカルに画面の中で揺れていた。

着工より一年。先月、ついに完成した亜空間発生装置の完成式典がパルムの同盟軍本部で行われました。式には、亜空間理論を確立した総合科学企業『インヘルト社』の『ナツメ・シユウ』代表取締役をはじめ、開発に加わった軍関係者や多くの企業が参加しました。今回披露されたこの装置により亜空間発生実験が成功すれば、有人での亜空間航行計画へと大きく前進することとなります。現在グランドが抱える資源枯渇問題に光明をもたらすこの研究、絶対に成功してもらいたいのですね。

今日のグーラルチャンネル5ヘッドライン」コースは」」まで!

「ユースキヤスターはハルでした！バイバイ！」

「ユースが終わる。と、画面で流れるスポーツユースの特ダネらしい、ユニバースボール出場選手達をチュエルシーが睨みながら、何故か怒声を上げる。

「ノー！ ユースそれで終わりナノ？ 納得いかないヨー！」

「なんていきなり怒つてるの、チュエルシー？」

「今のユース、スカイクラッド社が出てないネ！！ 亜空間航行の計画に、イッパイ出資してるんだヨ！ ウチの良い宣伝になると思つたのーー！」

「あらあら～。」

しかし多額の出資をしているのは何もスカイクラッド社だけでは無いように思える。何せ、ほぼ確実にお金になる亜空間研究。

誰が一番お金を出したかによつてどの程度の権利を得られるか等が決まつてくるとすると、裸一貫にならうとも亜空間研究に出資したくもなるものだ。

つまり、ある意味ではたつた今このグラールで財政の実権を握っているのはこのイン・・・ええと、インヘルト社であると言つても過言では無いかも知れない。

それを鑑みるに、この出資ダービーで一番が何処なのかを伏せるべく、出資した企業の名前を一切出さないと言つのは、ある意味では正しい判断とも言えるかも知れない。

もつとも、これらは全て单なる想像でしかないのだが。

「スカイクラッド社はウチの本社じゃん。リトルウイニングの宣伝にはならないって。」

「あら、でも風が吹けば桶屋が儲かるのよ～？ 少しでもスカイクラッドの知名度が上がつて、波風立つた方が、リトルウイニング

の利益にも繋がると思うんだけれど～？

「そう言わると何かそんな気もして来るけど・・・そんなことよりチエルシー。おっさん、いる？」

「あ、そういうえば、シャツチョサンが一人に用があるって言つてたね。一コース見ててすっかり忘れてたヨ。」

「ま、いいけど・・・奥におっさん、いるんだよね？」

「シャツチョサンのトコ行くなら、ついでにアレもお願ひネ。チョット、待つててネ。」

そう言つてチエルシーはイスをスイーツと滑らせて移動し、自分のデスクまで戻ると、そこで一枚のメモのような物を取り、またスイーツとこちらへと戻つて来てエミリアにそのメモを渡す。

「ランジエリースポット、リッチベルベット。ダグオラシティ店・・・ねえ、このいかがわしい領収書は、何？」

「経費じゃ落ちないカラ、自腹ダヨッて伝えてネ！」

エミリアの額に縦に筋が立つて行く。どうやら大分トサ力に來たようだ。

「あのエロオヤジ・・・！ ツケの払い忘れのみならず、経費の無駄遣いまでするか！」

「なんだ、クラウチさんもしてるんじゃない、経費の無駄遣い。私は、ふふんと鼻を鳴らして少し胸を張つてエミリアに少し得意げに、

「ほりエミコア～、私の燃料の無駄遣いなんてまだまだ生温い物でしょ～？」

「でも金額だけなら燃料の方が高い気がするけど。最近、値段高等

してゐるからね～、航空燃料つて。無駄に噴かした航空燃料に、更に

無駄に噴かしたターボロケットの燃料代を合わせたら、これの1・

3倍ぐらいになりそうだし。」

「うぐ・・・し、資源枯渇問題、早くどうにかならないかしらね～・

・・。」

まさかのカウンター。」これには流石に面食らつた。と、そんなやり取りを見ていたチャエルシーが、時計を見て少しハツとすると共に、手を叩きつつ私達に声を掛ける。

「ハイ、モウお昼休み終わっちゃうカラネ！ 文句は奥でネ！」

「ちよっとおひでたそ！…………つてうわ、酒臭つ！」

「ホント……まるでお酒を撒いたみたいに強烈ね……。」

到着早々、HIIコアが思い切り顔をしかめる。

「よお、来たか。」

「来たか~、じゃ無いっての！ いつもの飲み屋からまた電話来たんだよ！ いいかげんツケを払つて欲しい、つて！」

それから先ほどチャエルシーに渡された領収書を、クラウチに突き付けるようにして見せる。

「それに、これ！」

「ああん？ こりゃ資料の経費じゃねえか。どうしてお前がもつてんだ？」

「ここんないかがわしいものが経費で落ちるわけがないでしょ！ 常識で考える、常識で！」

「ああ？ バカ、わかってねーな。こいつ根回しも必要なんだよ。

「どういう根回しですか～…………モトウブの有力なローグスが経営してるとかなら分からなくもないですけど～…………」

「お、良く分かつてんじゃねえか。」「ええ～！？」

正直、ほとんど冗談だった。そもそもモトウブのローグスが水商売の店を経営しているとは思っていなかつたし、しかもダグオラシティみたいに大きな街に店を堂々と置いているなんて。

いや、それより確かにこいつ言つちよつと悪い事もしなくちゃいけなこような仕事とは言え、本当にローグスと関係を持つているとは。

やはりビースト、横の繫がりが悔れない。

「まあいい、それよりも仕事の話だ。」

そう言つと、クラウチさんは画面に映る水着の女性を幾つか最小化して、幾つかの写真や資料を大きくして見えるよつにする。

「喜べ、お前たちにふさわしい仕事を見付けてきてやつたぞ。こいつは緊急かつ、重要な依頼だ。急ぎ、探して欲しいヤツがいる。」「人の搜索・・・? 何かの重要参考人とか、要人とか?」「うんにゃ。俺が前に金を貸したヤツ。つまりところ、借金の取立てだ。」

「依頼主おっさんじやん! そんなの自分で探しに行け!」「そうですよ。私達は使いっぱなしじゃ無いんですから~。」「やかましい! どつかのタダ飯食らいがレリクスでの仕事。ボカつたから口クな依頼がこねえんだよ!」「う・・・それを言われると・・・」「ちよつと・・・言い返し辛いわね~・・・あ、でもボカしたの私じゃ無いですね~。」「んじやあエミリアだけに行かせるか?」「それは~・・・ちよつと~・・・。」「ちょ!~? むしろその反応の方が傷つくんだけどー?」「コラ、ここで言ひ合ってても仕方がねえだろ。せつやと話進めんぞ。」

これ以上脱線すると修復不可能だと判断したのか、そう言つて無理やり話を切り替えるクラウチさん。なるほど、この人はこいつやってのらりくらりとかわすのか。

「「検索対象者の名は「フレリー・ゴロフ」。51歳、男性・・・種

族はビーストだ。フレリーの船は、モトウブのクロウドッグ地方と場所が特定している。シティでもカジノでもなく・・・とてもヤツには用事が無さそうなヘンピな場所だ。

「どうやって船の場所を特定したんですか？」

「フレリーの嫁がアイツの船に発信機を仕込んでるんだと。で、訪ねて行つたら、取立てなら場所教えるからアイツに直にやれって、何故か怒鳴られちまつた。まそんなんワケで、アイツの船の場所が分かるんだ。分かったか？」

「ええ～、一応～。」

「場所まで分かってるんなら、なおさら自分で行けば良いじゃん。。。」

「何か言つたかごくつぶし？」

「なんでもないですーーー。」

そう言つと共にエミリアが踵を返すと、私の袖を引っ張つて、

「こんな酒臭い場所にいたら、飲んでもないのに酔つたりやうー、ヤ、
いこいこー。」

と言つ。まあ確かにもうそろそろこの場を離れたかったのは事実だ。なんせ本当にお酒の匂いがキツイ。エミリアに袖を引っ張られるままにその場を後にする。

船の中でぐっすり眠っていたメリーを部屋まで運び、ベッドの上に置いて部屋を出る。

部屋を出て真っ先に向うのはウェポンショップ。200メセタで借りていたブドウキ・ハドを返却し、新品の『ブドウキ・パム』を購入する。セットでダガータイプの武器を買うと割り引かれるそうなので、少し出費がかさむのが気になつたが、とりあえず購入することにした。

GRM社製のロングラン商品、その名もズバリ『ナイフ』。
テノラの製品は確かに頑丈で、大出力なフォトンジェネレーターを搭載しているので威力も見込めるが、いかんせんバランスが悪い。銃火器も、確かにバランスも大事だが、こと刃物に関しては特に重さのバランスが重要になつて来る。銃火器での戦闘の際、百発百中がやはり最高だが、そう言うワケにも行かない。正直な所、百発七十発が当たれば十分に生き延びる事が可能だ。しかし、刃物を用いた近接戦闘ではそもそも言つてられない。

一太刀読み違えればその時点で胴と首が離れかねないし、一瞬遅かつただけで心臓を貫かれかねない。

まあ私はその程度では死なないのだが、それは横に置いておこう。軽量かつ高い次元でバランスの取れた素晴らしい武器と言えばヨウメイ社だが、それはフォトンジェネレーターの出力を犠牲にした上で成り立っているワケであり、やはり威力の不足が目に付く。そ

れにデザインもあまり好きじゃない。

それらを統合した上で、やはり最高の妥協点としてバランスの取れた良い製品を提供しているのがGRM社だ。まあ、GRMタイム一等と呼ばれる故障の多さが目に付くが。

流石に新品でそれは無いハズなので、今回の仕事分は持つてくれるだろ？

・・・まあ、今回の仕事は実入りの無い仕事なので、次の仕事分も持つてくれないと困るのだが。

船に戻ると、Hミリアがいつも首に掛けているヘッドフォンを珍しく耳に着けて曲に聞き入っていた。

足音を立てないように注意しながら近付き、後ろからギリギリ視界に入らないぐらいの所まで耳を近付ける。僅かに聞こえて来た曲は、

「・・・・ I don't want this moment
to ever end • • Where everything
ng nothing without you • • I wan
t you to know!!」

「わあ！？」

「あらあら～、驚かせちゃったかしら～？ それにしてもエミリア、『With Me』なんて聞いてるなんて～。人は見かけに寄らない物ね～？」

「良いじゃん別に！ それに、いつもはもっと別の曲も聴いてるし！」

「あら～、悪い～なんて言つてないのよ～？」

HIIリアが少し慌てたような手付きでヘッドフォンを頭から下ろして首に掛け、音楽プレイヤーのスイッチを切る。それから座席のシートベルトをキチツと締める。

「さ、どうぞ。行くんでしょ？」

「あらあら～。曲を聴きながらでも良いのよ～？」

「そりゃあたしだって聴いてたいけどさ・・・だってあなたの操縦荒っぽ過ぎるんだもん。曲に集中出来ないって。」

「ん～、でも今回は素直にワープゲートを使おうと思つてるから～、多分大丈夫だと思つわよ～？」

「え、そう？ ジャ、大丈夫かな。」

そう言つてヘッドフォンを耳に被せるエミリア。音楽プレイヤーを取り出し、操作していると、何かを思い付いたように手を止めて、

私の方を向く。

「ねえねえ！ なんだつたらさ、船内スピーカーで流そつか？ あんたも好きでしょ？」

「あら～、それは名案ね～。じゃ、お願ひしようかしら～？」

「うん！ 任せてよ！」

そう言いつと共にヘッドフォンを再び首に掛け直し、席を立つて船内スピーカーに繋がる端末を弄り始める。私はコックピットに座ると、揺れないように注意しながら船を発進させる。

ほとんどホートでモトウブ行きのワープゲートの前まで着いた辺りで、船内スピーカーからノリの良い、割と激しい数世代前の曲が流れ始める。

「じゃ、行くわよ～。ちゃんとシートベルト締めておいてね～。」「うん～。」

「へー・・・おっさんはへんぴな場所つて言つてたけど、その割りに観光プラント並に船が多いじゃん。」

「そうね～、自然観察～とかハイキング～とかが静かにブームなのかしらね～。」

「それは無いと思つけど・・・つてかさあ、何であたしらがおっさんの貸したものの取立てなんかいけないワケ？ はあ、経費だけじやなくて以来まで私物化し始めてるよ、あのおっさん。誰かガツンと言つてくれないかな・・・。」

「ガツンと、ね～・・・。私が言いましょうか～？ 正直、上司があれだと働く気力も湧かないし～。」

「言つても良いけど、多分無駄だと思つよ？ あたしも言つた事あるけど、全然話聞いてくれなかつたし。あ、いや、でもあれはあたしだから、かな・・・。」

エミリアが少し暗い顔をして俯き、呟く。

「どうすればあたしの話を聞いてくれるようになるのかなあ・・・。

「ん～、そうね～・・・つん、取り合えず、依頼を遂行しましょ～。」

「えー？ そんな事であるおっさんが態度変えると思つ？」

「少しずつ依頼を遂行して行けばその内、話も聞いてくれるようになると思うわよ～？ でも、焦りは禁物よ～？ 『信頼』と言つ木は育つのが遅い木である』って言葉があるぐらいだもの～。」

「信頼、かあ・・・でもなあ・・・正直、この仕事つて結構キツイし、あんまり向いてないような気がするし・・・だつてホラ、さつきだつてあんたのパートナーマシナリーに・・・」

「おいお前達！ここで何してる！」

その声に驚いて辺りを見渡す。が、中々声の主が見当たらない。確かに少し高めの男性っぽい声だつたハズだ。声からして身長165は超えていそうなのだが、まるで見付からない。

「どつち見てんだよー。こつちだこつちー！」

そう言われて真後ろの下の方を見る。と、そこにはまるで子供のような背丈しか無いビーストの男性が立っていた。肌は黒く、目が青く、髪はオレンジ色で逆立っている。

その目付きや物腰から、これは子供では無く大人の小ビーストだと当たりを付けたが、正直言つて小ビーストなんて初めて見た。

「あ、あらー？ あらあらー、もしかして小ビーストの方ですか？」

「そうだよ、見りやわかんだろ・・・で？お前らここで一体何してるんだ？」

「あたし達、人を探してるんです。」

「人探し？」

「トニオー！こつちは駄目だよ、人つ子一人居ない。そつちは・・・ああ、二人見付けたんだ。」

そう言つてもう一人、こちらもまた非常に背丈の低いビーストの女性が現れた。こちらも歩き方などから察するにほぼ間違い無く大人的小ビーストなのだろう。

「いや、こいつ等は今来たばっかの同業者らしい。」

「あ、そつなんだ。」

「ええと、あなた方はここで何を〜？」

その質問に対し、トニーが呼ばれた男性の方の小ビーストが、「おつといけね」と言つた事を小声で言つて、

「その質問に答える前に、自己紹介をさせてくれ。俺はトニー・リマ。んで、こつちは・・・」

「あたいはリイナ・リマ。あたい達、夫婦で傭兵をやつてるんだ。」

「あ、あたしはエミリア。エミリア・パーシバル。んで、こつちはあたしのパートナーの・・・」

「リア・ゲートです。私達はリトルウイングと言つ軍事会社の社員でして、お仕事で人を探しているんです。あなた方も人探し何かですか？」

「ん、俺達はこの文化保護地区を見回るよつて言われて来てるんだ。」

「文化保護地区？」

エミリアが首を傾げて聞く。と、言つのも無理は無いだろう。なんせ辺り一体は單なる密林にしか見えない。自然保護区ならまだしも、周辺には文化的な物は一切見当たらないのだ。それを文化保護区と呼ばれても、イマイチピンと来ない。

「・・・この、密林が、ですか？」

「・・・お前達、そんな事も知らないでここに来たのか？」

トニーがもの凄く深い溜め息を吐く。本当にお前らは教育を受けてきたのか？とか、お前ら実際何歳だよ？とか、何で説明しなきやなんねえんだ？とか、そう言う心の声が聞こえてくるぐらに深い

溜め息だつた。その溜め息を聞いて、ヒミコアが少し頬を膨らます。

「駆け出しだから仕方ないんですー！ ん~、でも文化保護地区とかある観光地にしては誰もいなって言うのは不思議だね。船はこんなにいつぱいあるのに・・・。」

そのヒミコアの意見を聞いたトニオが、少しニヤリと笑う。

「なるほど、勘は良いみたいだな。」

「さつきあたいたいが出くわした原生生物もやけに凶暴だつたし、多分、奥で何か起こってるんじゃないかな。」

「う~ん、だとすると、奥の方に探している人も居るかも知れませんね~。」

「なんにせよ、奥に進まなければ見回りも人探しもできねえしな。「え、もしかしてそれ、奥に行く流れ？」

「ええ~。まあ、さつきちょこ~っと物足りなかつたんでしよう~？ なら丁度良いんじゃないかしら~？」

「えー・・・取立てなら戦わなくて済むと思ったのにー・・・。」「なら~、一人でお留守番する~？」

「それは寂しいからイヤ！」

「ど、言ひづケで~、私達は奥へ行きますの~。それでは~。
「お~お~、ちょっと待てよ~。」

そう言つてトニーが奥へと行こうとした私達を呼び止める。

「どうせ同じ奥に行くんだ、一緒に行かねえか？」

「あ、それもそうですね~。それでは、よろしくお願ひ致します~。」

「うん、よろしくね。それじゃ、取り合えずカーシュ族の村に向つて事で、良いかい？」

「ええ、お任せします。船を置いて何処に行つたのか分からぬ以上、それで問題ないですよ。」

「村？ その村までの道のりとかつて分かるの？」

「うん。カーシュ族は各地を転々とする部族なんだ。だからはぐれた仲間が分かるように、文字で目印を残してゐるんだ。で、その文字をあたいはあらかじめ学んできたから読めて、それを辿れば村まで行けるつてワケさ。」

「へ～・・・どんなのなんだろ。」

Hミリアがカーシュ族の文字に若干の興味を惹かれたところで、一向は歩き出す。目的地は取り合えず、カーシュ族の村だ。

第五話「Iの時間が永遠に続けば良いの。」（後編）

へい、反省します。でもだつてIの話にかなつペッタソ!だつたんだもん! と、言ひ訳で、是非とも聞いてみてください。『SUM41』の『With Me』です。SUM41っぽく無いだとか商業用曲だと色々と意見御座いますが、わっちは好きですよ~、こつさうのむ。てな具合で今回はここまで。ただ、次回は何時になるかちよ~つと分からないので、直ぐに来ると思わずこじ、気長に待つていてくださいまし~。ではでは~。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1204t/>

ファンタシースターポータブル2「小さな翼と歩く悪意」

2011年10月10日03時20分発行